

アーリン夫人の扇

—Oscar Wilde『ウィンダミア卿夫人の扇』に見る扇の二面性

輪 湖 美 帆

序

1892年2月20日の『ウィンダミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan*)初演からほぼ2ヵ月半後、当時人気の女性向け定期行物『クイーン』(*Queen*)のある記事は以下のように言う。

I wonder whether “Lady Windermere’s Fan” was bought at Duvelleroy’s, 167, Regent-street; there could be no more likely place for a loving husband to visit in search of such a gift for his wife. The fans here have always charms, and at the moment, perhaps, the assortment is especially fascinating. (“Dress and Fashion” 766)

リージェント・ストリートのデュヴェルロワとは、扇の製作・販売を行うジュール・デュヴェルロワ (Jules Duvelleroy) のロンドンの店のことで、本店はパリにある。デュヴェルロワはヴィクトリア女王をはじめ、王室に顧客を持つなど、英国においても存在感のある店であった (Adburgham 109-10)。ウィンダミア卿が夫人に贈る扇をロンドンのデュヴェルロワで購入したかどうかはさておき、舞台上に登場したこの扇——白いオーストリッチの羽と黄色い鼈甲の柄でつくられ、ウィンダミア卿夫人の名「マーガレット」の文字がダイヤモンドで刻まれていた (Kaplan and Stowell 19) —— は、似通った扇の売り上げをのばした可能性があるという (Kaplan and Stowell 19-20; Fortunato 96)。こうした点を考えた時、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の『ウィンダミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's Fan: A Play about a Good Woman*, 1893) を読むにあたり、同時代における扇の意義を考えることは不可欠と言えよう¹。本稿はしたがって、同時代に流通していた扇のイメー

ジを背景としてこのテキストを読むことを試みる。言い換えればこのテキストを、扇という「モノ」に注目し、世紀末の消費文化に開いた時、どのような新たな解釈が可能なのかを考察してみたい。

扇の意味

古代のヨーロッパと中東における扇の起源は、蠅を払うアイテムあるいは儀式用の長旗に見出すことができるという (Armstrong 13)。扇は、その発展に伴い儀礼的意味合いを強めた (16) が、こうした儀礼的な扇は 15 世紀までには衰退し、16 世紀初頭² にポルトガルの船が中国や日本から女性用の折りたたみ式の扇 (扇子) を持ち帰ってから、扇は女性のファッションアイテムとなった (Armstrong 20)。当初は高級品であった扇はやがて大衆化し、ヨーロッパにおいて恋の戯れと結び付けられるようになったという (21, 23)³。英国では 1711 年 6 月、日刊紙『スペクテイター』(*Spectator*) 102 号の中でジョゼフ・アディソン (Joseph Addison) が扇に関する手紙を紹介する形で以下のように述べている。“Women are armed with Fans as Men with Swords, and sometimes do more Execution with them” (313)。扇が女性の「武器」であるというこのアディソンの言葉は、19 世紀においても扇を語る際繰り返し引用されたという (Beaujot 103 n121)。アディソンは続けて以下のように言う。“Not to be tedious, there is scarce any Emotion in the Mind which does not produce a suitable Agitation in the Fan; insomuch, that if I only see the Fan of a disciplin’d Lady, I know very well whether she laughs, frowns, or blushes” (315)⁴。扇が女性の感情を表現する、ある種のコミュニケーションツールであるという認識は広くヨーロッパで共有されていたが、英国もその例外ではなかったことがここからわかる。ワイルドが編集していた雑誌 *The Woman’s World* の 1889 年の記事でも、18 世紀において、スペイン女性には少しばかり負けてしまうが、英国女性も “the language of the fan” ではひけをとらなかつたという記述もある (Robinson 116)。この “the language of the fan” については後述するが、このように英国においても他のヨーロッパ諸国同様、扇は長年、女性の感情を表現するツールとして見なされていた⁵。

19 世紀においても扇は、その前の時代と同じく、特に恋愛の場において女性の意思表示の重要なツールであった。冒頭で紹介したデュヴェルロワで売られる扇には、扇を使った恋愛のサインの出し方の説明書が添えられていたという (Beaujot 77; Armstrong 182-83; Wheatley 31)⁶。これは「扇言葉」 (“the language of the fan”) と呼ばれ、ド・ヴィア・グリーン (Bertha De Vere Green) やリード (G.

Woolliscroft Rhead) によると、その起源はスペイン語で書かれた、恋のやり取りに役立ちそうな、扇による 50 ものサインを掲載した指南書にあるとされ、その後ドイツ語に訳されたものがもとになっているという。やがてその短縮版が J. デュヴェルロワによって英語で出版された (De Vere Green 154-57; Rhead 136-37)⁷。たとえば、閉じた扇を心臓のそばに持ってくると「あなたは私の心を射止めた」、閉じた扇を右目に乗せると「いつあなたにお目に掛かれるかしら」といったものであった (津田 59)⁸。しかし実際にはライバルやお目付け役といった、他人の目にも明らかなため、あまり本気にとることはできないという (Wheatley 31)。だが、アリエル・ボジヨ (Ariel Beaujot) が主張するように、ヴィクトリア朝の結婚市場において、コード化されないものも含んだ広義の〈扇言葉〉が、女性が自身の力で夫を獲得する際に力を持つこと (78) は広く認知されていたと言えそうである。以下、スペインに起源を持つ恋愛のサインの〈扇言葉〉に限らず、扇による女性の意思表示を特に示す場合は〈扇言葉〉と表記する。

ここで興味深いのは、同時代の扇に関する雑誌記事を見ると、「扇言葉」や扇による女性の意思表示すなわち広義の〈扇言葉〉が外国のイメージと結び付けられがちな点である。例えば英国の雑誌 *The Leisure Hour* の 1882 年 7 月の記事ではスペインの扇に関して以下のような説明がなされる。“With such an *abanico* she [a Spanish lady] can converse fluently in that copious but difficult vocabulary the “language of the fan” — a language far more dramatically expressive than that of flowers” (“Fans” 419). すなわちスペインの女性は「扇言葉」を巧みに使いこなすという⁹。また、ワイルドが編集した雑誌 *The Woman's World* 1888 年 11 月号の記事 “Feather Fans and Others” は、フランスの女性は扇で感情表現をすると唱える。

The Frenchwoman would not be happy on any public occasion without her fan; but it is obvious that she prizes it less as an instrument of coolness than as an aid to gesture and as a means of giving point and piquancy to her conversation. She waves it gently backwards and forwards when she is agreeably entertained, she shuts it up with a sharp rattle and snap when she is annoyed. . . . (36)

この記事によれば、こうして扇を使って雄弁に語るフランス人女性に対し、英国人女性にとっての扇は育ちの良さを表すものに過ぎないという。“Our own country-women, however, never seem to be quite at home with a fan. English people are not given to gesture; an absolute and almost statuesque repose of manner being

considered here a mark of good-breeding” (“Feather Fans” 36). これは先に紹介した、(18世紀の)英国人女性もスペイン人女性同様扇を巧みに使うという *The Woman’s World* に掲載された意見に反するとも言えるが、ここで注目すべきは、こうした記事において扇を使った女性の意思表示が語られる際、そのようなことをしない英国人女性を評価するために、外国が想起されているように読める点である。すなわち、扇を使った女性による意思表示は、英国人女性がするのは望ましくない行為だという考えが、そこに透けて見えるのである。

また、この時代の扇と言えは当事流行を極めていたジャポニズムの代表的なアイテムであった。この劇が公開された1892年にはすでに古びたものとなっていたが(Lambourne 117)、扇はお盆や箱、屏風などと並んで、当世風の「芸術的な」部屋を飾るグッズとして、広く浸透していた(Lambourne 109)。ランボーン(Lionel Lambourne)によれば、“The fan — cheap, frivolous, flirtatious and univerversally [sic] available — became a badge of commitment to the arts for those of both high and low degree throughout the last quarter of the nineteenth century”(110)であり、その人気は確固たるものであった。ジャポニズム流行の理由としては、ヴィクトリア朝英国がそこに中世の理想を見たというものが代表的であるが、もう一つは、谷田博幸の言うように「現実の英国社会では禁じられた性的幻想の放縦を許す」(39)という意味合いもあった。もちろんジャポニズムの文脈で語られる扇は主に室内装飾用であり、ファッション用のものとは切り離して考えるべきものではある。だが重要なのは扇という言葉が当時の人々に日本の扇も想起させ、そこに性的に奔放なイメージが多少なりとも伴っていた可能性があることである。

性的に自由なイメージがあると信じられた外国に扇が結び付けられていたことは、決して偶然ではないであろう。前出のボジョによれば、〈扇言葉〉が、女性が恋愛の場で積極的になることを可能にする一方で、挿絵等での扇は、女性を「善良な性的欲望のない女性と軽薄で奔放な女性」(“the good asexual woman and the flirtatious coquette”)とに分け、前者を称揚する風潮があったという。すなわち女性の積極的な意思表示に対しては、警戒する姿勢がヴィクトリア朝英国においては存在したのである。ボジョはさらに、当時のファッションプレートに描かれる英国淑女が持つ折りたたみ式の扇は、その大半が閉じられており、「性的欲望のない受動的な」(“asexual and passive”)女性らしさを強調していたことを指摘する(78)。

こうした記事からわかることは、『ウインダミア卿夫人の扇』が発表された頃の英国においては、女性の意思表示の道具として、特に女性が恋人や将来の夫を得

るための道具としての広義の〈扇言葉〉の存在は広く知られていたものの、その使用は必ずしも好意的に見られていたわけではなく、外国で行われるべきもので、英国での扇は閉じられた、貞淑さと品格の象徴であるべきだという考えが同時に存在していたということではないだろうか¹⁰。

『ウィングミア卿夫人の扇』における扇

こうした当時の扇の意義を考慮したうえで『ウィングミア卿夫人の扇』のテキストを見てみたい。ここで物語内容を概観しておこう。善良で貞淑なウィングミア卿夫人(Lady Windermere)は、21歳の誕生日に愛する夫から自らの名が記された扇をプレゼントされる。だが、誕生日パーティーを前に夫人は夫が良からぬ噂のあるアーリン夫人(Mrs Erlynne)に貢いでいるらしいことを知ってしまう。夫人は夫を問いたがすが、疑念は晴れないまま夫は強引にアーリン夫人をパーティーに招待する。失意のウィングミア卿夫人に、ウィングミア卿の友人でもあるダーリントン卿(Lord Darlington)は愛を告げる。ウィングミア卿夫人は、一度は断るが、夫に宛てた手紙を残しダーリントン卿の家へ向かう。その手紙に気づいたアーリン夫人は、ウィングミア卿夫人がかつての自分と同じ過ちを繰り返そうとしているのを察知して、彼女の後を追う。アーリン夫人は、実はウィングミア卿夫人の母親で、それを材料にウィングミア卿をゆすっていたのだった。しかしアーリン夫人の、幼い息子のためにも戻るべきだという説得が成功し、ウィングミア卿夫人が夫と息子のもとに帰ろうとした時、ダーリントン卿がウィングミア卿、そしてアーリン夫人に求婚しているオーガスタス卿(Lord Augustus)らを伴って戻って来る。ウィングミア卿夫人はカーテンの後ろに、アーリン夫人は別室に隠れるが、ウィングミア卿夫人の扇が部屋にあるのが見つかってしまう。ウィングミア卿夫人は、アーリン夫人に促され何とかその場から逃れるが、アーリン夫人は別室から登場し、男性たちに向かって、自分が間違えてその扇を持ってきてしまったのだと言い、彼女をかばう。その後事の顛末を知ったウィングミア卿夫人は、アーリン夫人と和解し、彼女に頼まれるままに扇を譲る。アーリン夫人はオーガスタス卿の誤解も解き、彼の求婚を受け入れ、自分が母であることをウィングミア卿夫人に告げないまま、オーガスタス卿と外国へ旅立とうとするところで、劇は幕を閉じる。

このテキストにおいて扇が夫の愛の象徴からウィングミア卿夫人にとってアーリン夫人を攻撃するための武器と見なされ、やがては彼女の不貞の証拠となりそうになり、最終的にはアーリン夫人とウィングミア卿夫人の女性同士の交流を示

すようになる流れはキャサリン・ワース (Katharine Worth) がすでに詳細に追っている (92-94)。またピーター・レイビー (Peter Raby) はこのテキストにおける扇はコケトリー (媚態) の象徴であり、ウィットに富んだアーリン夫人がそれを取り除くことで、ウィンダミア卿夫人が無垢な状態に戻ることを描き、上流階級の偽善を皮肉っていると主張する (89) が、当時認識されていた、主に恋愛の場において発せられる、女性の意思表示としての〈扇言葉〉を思い出すなら、こうした視点には発展の余地があるように思われる。

このテキストにおいて、扇の持ち主であるウィンダミア卿夫人による〈扇言葉〉の使用は、物語の進行上大きな力を持たないように見える。もちろん、佐々井啓が指摘するように、このテキストにおいて扇は「持つ人の心の動きをあらわす大切な小道具」(82)として描かれている。アーリン夫人を扇で打つと発言した自分を説得しようとする夫を横目に、ウィンダミア卿夫人が“Will you hold my fan for me, Lord Darlington?” (Wilde, LWF 352)と扇をダーリントン卿に託すシーンは、佐々井も挙げているように (81-82)、その象徴であろう。言い換えれば、ウィンダミア卿夫人が夫の目の前でダーリントン卿を頼ることで夫にあてつける行為は、広義の〈扇言葉〉に該当するとも言える。だが、そうしたシーンが描かれる回数はそれほど多くはなく、ウィンダミア卿夫人が自らの意思を示そうと、パーティーに訪れたアーリン夫人の顔をその扇で打とうとするときも、実際には叩けず落としてしまう。ト書きによれば、“Mrs Eryllynne enters, very beautifully dressed and very dignified. Lady Windermere clutches at her fan, then lets it drop on the floor. She bows coldly to Mrs Eryllynne, who bows to her sweetly in turn, and sails into the room” (Wilde, LWF 353, Italics in original)となっている。したがって、このテキストにおいては、女性が〈扇言葉〉を通じて恋愛の場で立ち振る舞う様子はとりたてて描かれていないように見える。しかしここで見逃せないのは、このテキストにおいて、同時代の人々が持っていた扇に対する二つのイメージ、言い換えれば〈扇言葉〉に代表されるような、女性の意思表示と自由奔放さと、それに対する警戒と貞淑さの両方の要素が、ウィンダミア卿夫人の扇を軸に描かれていることである。すなわち、女性が未来を切り開くための意思表示や恋愛に奔放なイメージはアーリン夫人を、受け身で貞淑な女性のイメージはウィンダミア卿夫人を示し、その二人の特性が扇を軸に絡み合っていくように読めるのである。

先に述べたように、このテキストにおいて扇は、夫から妻へのプレゼントであり、不貞を許さないウィンダミア卿夫人の貞淑さの象徴のようである。だがそれは終盤彼女の不貞の証拠になりそうになり、ダーリントン卿の誘いに自らの意思

で応じようとはするものの、それが間違いだったと気づいた時には運命を受け入れるしかない、ウィンダミア卿夫人の受け身な態度を明るみに出す。一方アーリン夫人は、そうした状況を逆手にとり、自ら別のシナリオを提出することでプロットを動かしていく。すなわち、扇を利用し、自らの意思を通そうとする女性が、このテキストにはもう一人描かれているのである。

扇のために追い込まれるウィンダミア卿夫人と、扇を使うことなく、扇にまつわるシナリオを用意することで自らの意思を通すアーリン夫人の対照的な姿は、ウィンダミア卿夫人が夫に向けて書いた決別の手紙と並行して描かれることで、さらに強調される。すなわち、ダーリントン卿の誘いに乗り彼の家に来たことを後悔するウィンダミア卿夫人は “I must go back — no; I can't go back, my letter has put me in their power — Arthur would not take me back! That fatal letter! No! Lord Darlington leaves England tomorrow. I will go with him — I have no choice” (Wilde, *LWF* 364) というように、手紙を「致命的な手紙」と叫ぶ。一方で彼女は、ダーリントン卿の家に置いてきてしまった扇を思い、これを再び「致命的な」扇と呼んでいる。

I wonder what happened after I escaped from that horrible room. Perhaps she [Mrs Erlynne] told them the true reason of her being there, and the real meaning of that — fatal fan of mine. Oh, if he [Lord Windermere] knows — how can I look him in the face again? . . . Life is terrible. It rules us, we do not rule it. (Wilde, *LWF* 375)

このように手紙と同様の効力を持つ扇は、ここでもウィンダミア卿夫人の意思を示す広義の〈扇言葉〉になっていると言えるが、これは皮肉にもウィンダミア卿夫人自身を「選択肢がなく」「人生に支配される」という受け身の状況に追い込んでいる。だがアーリン夫人はそこに咄嗟に自分なりのシナリオを重ねることで、その状況を打開していく。たとえば彼女はウィンダミア卿夫人が夫にあてて書いた手紙を見つけ、夫と娘を捨てた過去の自分の過ちを思い出してその手紙を隠そうとするが、こともあろうにウィンダミア卿の前でそれを落としてしまう。その際、彼女は以下のようにふるまう。

LORD WINDERMERE [*Picks up letter.*] You have dropped something.
 MRS ERLYNNE. Oh yes, thank you, that is mine. [*Puts out her hand to take it.*]
 LORD WINDERMERE [*Still looking at letter.*] But it's my wife's handwriting,

isn't it?

MRS ERLYNNE [*Takes the letter quickly.*] Yes, it's — an address. . . .

(Wilde, *LWF* 362, *Italics in original*)

こうして手紙を咄嗟のシナリオでウィンダミア卿の目から守り、「選択肢がない」状態であったウィンダミア卿夫人の運命のシナリオを書き換える。また、ダーリントン卿の家に扇を落としたのは自分だと宣言し、彼を訪ねたのはウィンダミア卿夫人ではなく自分だというシナリオを生みだし、「我々が支配するのではない」はずであった(ウィンダミア卿夫人の)人生を、ここでも動かすのである。

このように、このテキストにおいて〈扇言葉〉は一見存在感がないように見える。また、扇が手紙同様ウィンダミア卿夫人の、夫やダーリントン卿に対する意思表示を包含し、彼女の破滅をもたらしうるものとして描かれる際にも、アーリン夫人の紡ぐもう一つのシナリオによってその意味が変えられている。言うなれば、手紙は夫に読まれる前に燃やされることで、決別を告げるその内容は効力を失い、住所を書いたメモだというアーリン夫人の描くシナリオが力をもつ。一方扇はウィンダミア卿夫人からダーリントン卿へのメッセージともなりえたが、アーリン夫人の提出するシナリオによって、こちらも無効化される。したがってこのテキストにおいては、ウィンダミア卿夫人による広義の〈扇言葉〉は存在感を潜めているが、代わりに扇にまつわるシナリオを操るアーリン夫人が、物語の展開に大きな役割を果たすことで、扇が同時代の人々に喚起する、〈扇言葉〉を含むイメージを保っていると言えよう。

事実、アーリン夫人はウィンダミア卿夫人あるいは自分自身の不貞の証拠となりかかった扇を、新たなシナリオを提出することで、自らの貞淑性の象徴にまで転換し、広義の〈扇言葉〉が本来目的としていた、将来の夫を獲得することにまで成功している。ダーリントン卿の家に扇を持ち込んだのは自分だとアーリン夫人が宣言する場には、彼女に求婚しているオーガスタス卿も居合わせるが、彼は翌日夫人の提出するシナリオにすっかり納得するのである。

My dear fellow, she has explained every demmed thing. We all wronged her immensely. It was entirely for my sake she went to Darlington's rooms. Called first at the Club — fact is, wanted to put me out of suspense — and being told I had gone on — followed — naturally frightened when she heard a lot of us coming in — retired to another room — I assure you, most gratifying to me, the

whole thing. We all behaved brutally to her. She is just the woman for me. (Wilde, *LWF* 387)

こうして、扇はアーリン夫人の純愛と奥ゆかしさ、あるいは貞淑さの象徴として解釈され、最後にはこれまでその奔放さゆえ彼女を嫌悪していた(実の娘の)ウィンダミア卿夫人に、“a very good woman!” (Wilde, *LWF* 387) と評されるまでになるのである。

一方、貞淑さの象徴とも言えるウィンダミア卿夫人も、女性の意思表示や恋愛に対する考えを次第に緩めていく。ストーリー序盤、ダーリントン卿がウィンダミア卿夫人に“do you think seriously that women who have committed what the world calls a fault should never be forgiven?” と尋ねると、彼女は“I think they should never be forgiven” (Wilde, *LWF* 338) と答えており、夫と愛人関係にあると噂されるアーリン夫人を扇で叩く時まで宣言している。だがやがてダーリントン卿のもとへと走った自分を、アーリン夫人がかばってくれたことを悟ると、ウィンダミア卿夫人は何も知らない夫に対して“I don’t think now that people can be divided into the good and the bad, as though they were two separate races or creations” (Wilde, *LWF* 377) と言い、善良と言われる女性も嫉妬や罪を持ち合わせていることがあるし、悪女と呼ばれる女性も、悲しみや自己犠牲の心を持っている可能性があると言言したうえで“I don’t think Mrs Erlynne a bad woman — I know she’s not” (Wilde, *LWF* 377) と宣言している。これはボジョが示していたような、同時代の女性を二分化する傾向に対する批判的コメントと取ることもできよう。こうして二人の女性が最終的にそれぞれ複雑に絡み合った二面性を持つことが明かされるが、ここで思い出したいのは、第一幕でウィンダミア卿夫人の名として登場し、扇に刻まれていることも言及される「マーガレット」が、アーリン夫人の名でもあることが物語終盤明らかになることである。一見異なる特性を持つ二人の女性の名が同じであり、その名が一つの扇に刻まれていることは、このテキストにおけるウィンダミア卿夫人の扇が、同時代の扇が持ち合わせていた女性の意思表示と貞淑さという二面性をあわせもつことを象徴するかのようである¹¹。さらには、扇の持ち主であるウィンダミア卿夫人よりも、アーリン夫人の操る、扇をめぐるシナリオの方が力を持っていたことをここで思い出すなら、その理由は、この扇がアーリン夫人のものでもあったから、とは言えまいか。アーリン夫人はいわば自らの扇を用い、異なる位相で〈扇言葉〉を発していたとも言えよう。

結

以上のように、このテキストにおいてはウィンダム嬢夫人によるいわゆる広義の〈扇言葉〉自体の力は弱いとしても、同時代の人々が抱いていた扇への二つのイメージ——恋愛における女性の主体的な意思表示と、女性の受動性、貞淑さの象徴であるべきというイメージ——の両者の要素がちりばめられつつ付与されている。言い換えれば〈扇言葉〉を使わずに、自ら扇にまつわる物語を紡ぐことで、本来〈扇言葉〉を使って女性たちが獲得を目指したもの、すなわち将来の夫を、アーリン夫人は手に入れている。そして同時に、それを成し遂げたアーリン夫人は称えられながらも国外へ行かねばならないという、〈扇言葉〉のもつ魅力と危険性に対する同時代人の認識に応えた物語展開になっていると言えよう。すなわち、扇を見た際に同時代人が期待する要素をうまく裏切り、その期待をずらしながらも、最終的には回収する展開になっていることが、扇に注目することで明らかになるのである。これはいわば〈扇言葉〉を女性が発することを快く思わない社会規範に最終的には従う展開と捉えることもできよう。しかし同時に、一度の「過ち」が女性にとって致命的なヴィクトリア朝において、言葉(扇)を奪われていたアーリン夫人が、再び扇という言葉を取り戻す物語とも読めるのではないか。

* 本稿は日本ワイルド協会第39回大会シンポジウム「流行／装飾／マテリアル——ワイルドと世紀末の消費文化」(2014年11月29日、青山学院大学青山キャンパス)における口頭発表「貞淑な扇の『モノ』語り——『ウィンダム嬢夫人の扇』に見る扇の二面性」に基づく。当日、貴重なコメントを賜ったことに感謝申し上げたい。なお本研究はJSPS科研費26770106(若手研究(B))の助成を受けたものである。

註

- 1 本稿ではテキストとして Wilde, Oscar. *Lady Windermere's Fan: A Play about a Good Woman*. Oscar Wilde: *The Major Works*. Ed. and introd. Isobel Murray. 1989. Oxford: Oxford UP, 2008. 331-87 を使用している。この劇の出版されたヴァージョンの初版は1893年(Murray 617)。以下出典を示す際には *LWF* と略す。
- 2 De Vere Green 96 も参照。
- 3 英国ではエリザベス1世 (Queen Elizabeth I) が持ったことから(折りたたみ式、固定式両方の)扇が流行したという (Wheatley 7)。Alexander 14 も参照。
- 4 アディソンのこの記事に関しては、山崎稔恵『気取りへの視線』が詳しい(22-26)。
- 5 山崎稔恵と佐々井啓によれば、18世紀初期においても、扇が男性を魅了する力が

- あることが風刺的に語られていたという（「扇にみるコケットリーの表現」）。
- 6 アームストロング(Nancy Armstrong)によれば、Charles Francis Badiniによって編み出された、扇を使ってアルファベットを伝える方法も18世紀末に出版されていたという(183)。
 - 7 Armstrong 182-83 も参照。
 - 8 Rhead 137 も参照。
 - 9 スペインを舞台とするワイルドの「王女の誕生日」(“The Birthday of the Infanta,” 1889/1891)においても、王女や少女たちが扇を使う様子が描かれている。Horst Schroederによれば、この作品の舞台は17世紀だという(289)。王女は扇のかげで大人を笑ったり(“Birthday” 223)、こびとを褒める際扇をはためかす(“Birthday” 234)など、扇は感情を隠したり表現するのに使われ、王女の無邪気な残酷さを強調しているかのようである。
 - 10 山崎によれば、18世紀の英国においても扇は二面性を持つものと見なされていたという。具体的には、扇は18世紀においても恋の武器として見られていたが、それは軽薄な行為としても考えられていた。また扇は異性など、直視すべきでないものから顔を覆いつつ、のぞき見も可能にする二面性を持つものとして、しばしば風刺の対象となっていたという(『気取り』26-58)。特に前者は本稿で検討している19世紀の扇のイメージにも共通すると言えよう。
 - 11 この扇には様々な二面性が読み込まれており、たとえば丸橋良雄は、この扇は「単なる小道具を越え」た存在で、アーリン夫人の母性と(ダンディが重視する)ファッションという二つの要素を結びつけていると指摘している(10)。

Works Cited

- Adburgham, Alison. *Shops and Shopping 1800-1914: Where, and in What Manner the Well-Dressed Englishwoman Bought Her Clothes*. 1964, 1981. London: Faber and Faber, 2012. Print.
- Addison, Joseph. *Spectator* 27 June 1711. Rpt. in *The Spectator*. By Addison and Richard Steele, et al. Ed. Gregory Smith. Vol. 1. 1907. London: Everyman's-Dent; New York: Everyman's-Dutton, 1970. 313-16. Print.
- Alexander, Hélène. *The Fan Museum*. London: The Fan Museum; London: Third Millennium, 2001. Print.
- Armstrong, Nancy. *A Collector's History of Fans*. London: Studio Vista, 1974. Print.
- Beaujot, Ariel. *Victorian Fashion Accessories*. London: Berg, 2012. Print.
- De Vere Green, Bertha. *A Collector's Guide to Fans over the Ages*. London: Frederick Muller, 1975. Print.
- “Dress and Fashion.” *Queen, the Lady's Newspaper & Court Chronicle* 7 May 1892: 765-68. Microform.

- “Fans.” *The Leisure Hour* July 1882: 417-21. *British Periodicals*. Web. 5 Aug. 2014.
- “Feather Fans and Others.” 1888. *The Woman’s World*. Ed. Oscar Wilde. Vol. 2. London, 1889. Tokyo: Athena Press, 2007. 36-38. Print.
- Fortunato, Paul L. *Modernist Aesthetics and Consumer Culture in the Writings of Oscar Wilde*. New York: Routledge, 2007. Print. Studies in Major Literary Authors.
- Kaplan, Joel H., and Sheila Stowell. *Theatre and Fashion: Oscar Wilde to the Suffragettes*. 1994. Cambridge: Cambridge UP, 1995. Print.
- Lambourne, Lionel. *Japonisme: Cultural Crossings between Japan and the West*. London: Phaidon, 2005. Print.
- Murray, Isobel. Notes. *Oscar Wilde: The Major Works*. By Oscar Wilde. Ed. and introd. Isobel Murray. 1989. Oxford: Oxford UP, 2008. 574-635. Print.
- Raby, Peter. *Oscar Wilde*. Cambridge: Cambridge UP, 1988. Print. British and Irish Authors: Introductory Critical Studies.
- Rhead, G. Woolliscroft. *History of the Fan*. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1910. Print.
- Robinson, F. Mabel. “Fans.” 1889. *The Woman’s World*. Ed. Oscar Wilde. Vol. 2. London, 1889. Tokyo: Athena Press, 2007. 115-19. Print.
- Schroeder, Horst. “Some Historical and Literary References in Oscar Wilde’s ‘The Birthday of the Infanta.’” *Literatur in Wissenschaft und Unterricht* 21.4 (1988): 289-92. Print.
- Wheatley, Ivison. *The Language of the Fan*. York: York Civic Trust; n.p.: Maxiprint, 1989. Print.
- Wilde, Oscar. “The Birthday of the Infanta.” *Collins Complete Works of Oscar Wilde*. Centenary ed. Glasgow: HarperCollins, 1999. 223-35. Print.
- . *Lady Windermere’s Fan: A Play about a Good Woman*. *Oscar Wilde: The Major Works*. Ed. and introd. Isobel Murray. 1989. Oxford: Oxford UP, 2008. 331-87. Print.
- Worth, Katharine. *Oscar Wilde*. London: Macmillan, 1983. Print.
- 佐々井啓『ヴィクトリアン・ダンディー・オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」』勁草書房、2015年。
- 谷田博幸『唯美主義とジャパニズム』名古屋大学出版会、2004年。
- 津田紀代編著『扇物語—西洋の扇と女性のよそおい—』ポーラ文化研究所、2008年。
- 丸橋良雄「ウィンダム嬢夫人の『扇』について」『オスカー・ワイルド研究』2 (2000): 1-12。
- 山崎稔恵『気取りへの視線—ひとつの服飾美学—』関東学院大学出版会、2004年。
- 山崎稔恵、佐々井啓「扇にみるコケットリーの表現—アディソン、ステイール、ポーブ、ゲイの作品において—」『日本女子大学紀要 家政学部』31 (1984): 97-102。